

10. 朝河から高橋春吉宛書簡(1918年2月9日付)

自筆原本・福島県立図書館蔵(A-11-1)

「人生最大の快事ハ理想の天地を作るにあり 人は理想の動物也、理想と共に進化し行く生物也」

予が不始意を以て、予れは人は境遇を支配せらるる者なり
弱きものありて、古事乃至人は皆弱き境
遇より出でず、其悪きや、其元之悪きより百倍
誤解するに、至人はナホレシンの謂にありて
終生碌々として隣人の外に名を知れぬ農夫
一猶至人たるを得
一豈「名」未練珠の間、至人より遠く、
名は天理の命也、人造の物質より遠く

人生最大の快事ハ理想の天地を作るにあり

人は理想の動物也、理想と共に進化し行く生物也

嗚呼古来理想を抱きながら
之を實現する能はずして死
無限の痛恨を地中に埋めた
予の豈孝を教ふるらん
貴兄が住める天地は小なり、真の
巨大の天地なり、予れは之を
理想の天地たるを得ん、其快
古言に比す

基督、孔子、ソクラテス、トマスモア
等も、予れは「理想」の神也

朝河から高橋春吉宛書簡(後半部分)

之を實現する地は死
 無限の痛恨を地下に積んだ
 子の豈に孝を教へんや
 貴兄が住める天地はわき、真子
 巨大の小天地を、それど之を
 理想の天地たぐいしを得ん其快
 古言に比す

基督、孔孟、ソクラテス、トマスモ大
 韓非、ポール、等皆貴兄の愉快を
 得ずして残死せり

貴兄の地位真に彼等が探く
 羨む所

而して特ニ余が欽
 羨の堪へざる所

二月九日

春吉

高橋 愛兄

父母の序の新居を頼りては居るが、
 此れは新居の上也

11. 朝河貫一の日本人女性との恋愛

- ▶ 『朝河貫一書簡集』 ---11. 「某日本婦人宛（案）」 1895年(明治28年)9月4日付、
- ▶ 12. 「田辺良平宛(案)」 同年9月9日付。
- ▶ 貫一は、東京専門学校を明治28年に卒業する頃、文通していた女性とプラトニックな恋愛関係にあったが、渡米を前に関係は終わる。
- ▶ 「長井ふく」 --- 「高橋春吉宛(写)」 1894年(明治27年)10月25日付書簡で文通相手
- ▶ として言及（「長井ふく氏は如何なる人か御聞申度候。小生上京の節、本宮ニ立寄面会仕り、
- ▶ 其の純潔善良なるに驚嘆仕候」）。書簡末尾に「昭和27年11月安藤ふく叔母より拝借して
- ▶ これを写す」。
- ▶ 「安藤ふく」 ---朝河の伯母、安藤八重の長男・正司のいとこの未嵯夫との間の
- ▶ 長男・信を連れて正司の後妻となる。福島県女子師範学校の第一回卒業生。
(山内晴子『朝河貫一論』 102-104頁、同編『朝河貫一資料』 367頁)

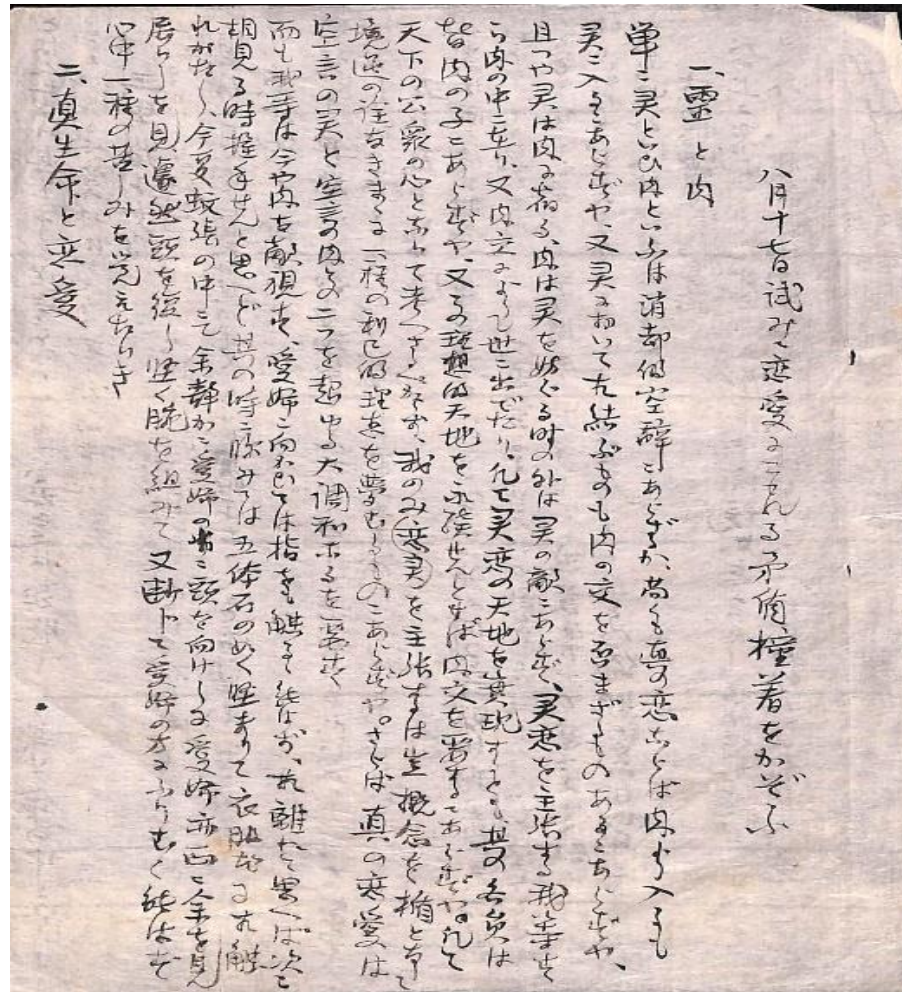
12. 貫一が1895年夏に立子山で書いた恋愛の手記（1）

明治28年8月9日の手記の最初の部分

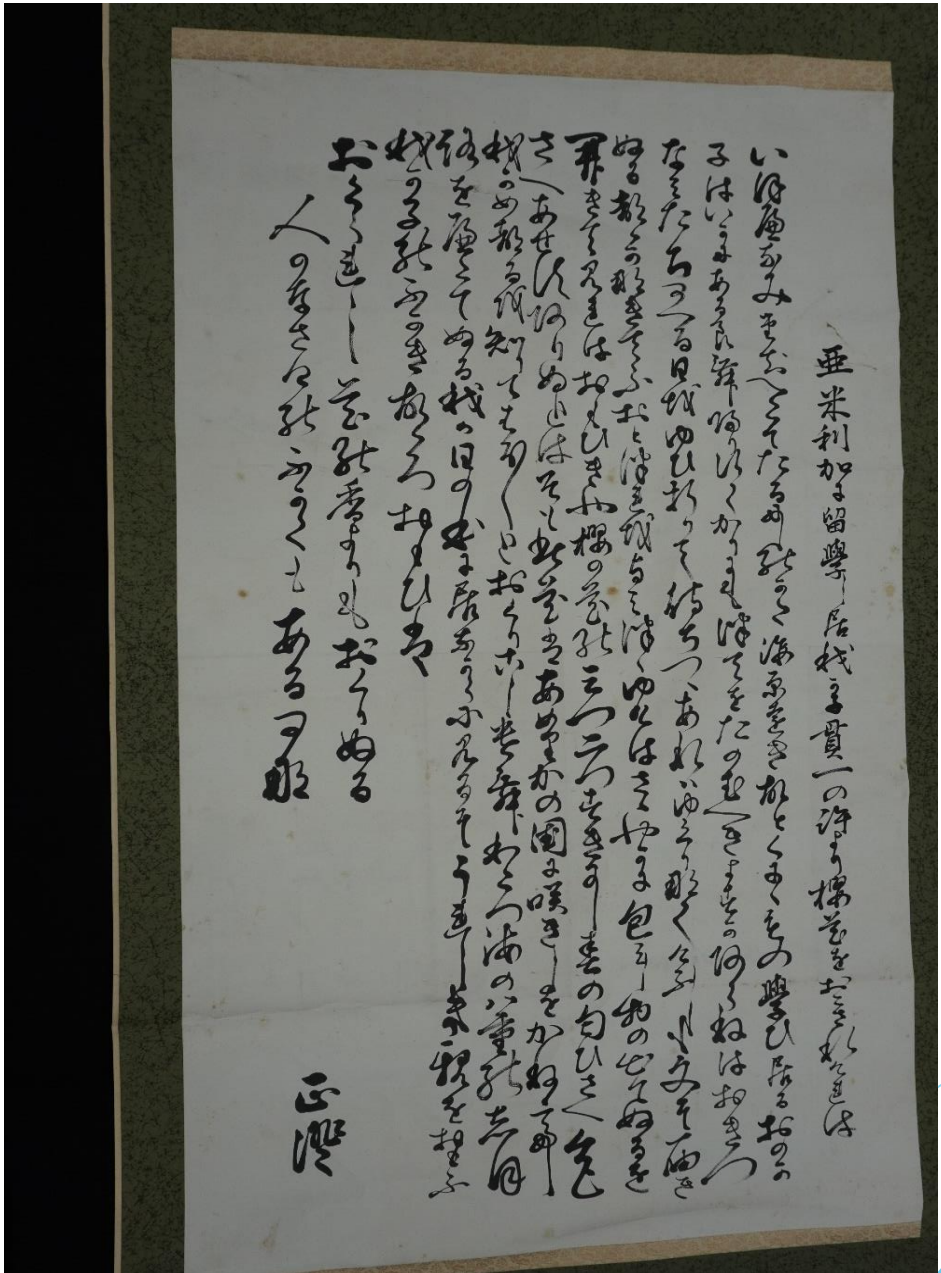
二十 廿二年八月九日
「中らつとをわたる舟人のちをたえ、ゆらゆらにぬ恋の道かた」
博覧のるに我れ種々人々の姿を見たり、今やいばく我々のどうを見んて、
あり、人衆を傍観視すは亦のこゝ道にまで寺を視するに至る、
の海ありと雄、昔者達文は前者を往る時あり、今や輝の身ぬ、
と、めつあるよし」と語り思ひき、初て、今や輝の身ぬ、
み歩をふれ初めたは、全く愛婦の面あり、愛婦の面あり、
完全の教を符たり、又その風き旭光と見たり、愛婦と融合せ、
天と融合したり、愛婦の面あり、神見中、要する、今の余は、
れぬ、ちり「見よ、昨年まで余は多人衆の、立ちりくは、
ま、こすを、今や輝の人を見、
めく、心奪す、
「こ作と、
自れ界は、
余と、
「余、
見ん、
感、
知、
と、
「融、
同、
道、
「思、
示、
中、
「二、

貫一が1895年夏に立子山で書いた恋愛の手記（2）

明治28年8月17日の手記の最初の部分



14. 朝河正澄の書幅



朝河正澄の書幅の翻刻

(早稲田大学非常勤講師・藤原秀之氏による)

- ▶ 亜米利加に留学し居我か子貫一の許より桜花をおこされければ
- ▶ いほへなみたちへたてたる にしのかた海原遠きことくにゝ もの学ひ居る
おのか子は いかにあるらむ 帰り行くかりにもつてをたのむへき よすか
あらねは おきつなミたちかへる日を ゆひ折りて待ちつゝあれハ ゆくり
なくけふにも文そ届きぬる つゝかなきてふおとつれを よみつゝゆけは
さゝやかに 包ミし物の出てぬるを 開きて見れはおもひきや 桜の花の三
つ二つ すきにし春の匂ひさへ 色さへあせすありぬれは そも此花はあめ
りかの 国に咲きしを かねて我か めつるを知りてはる / \ と おくりこ
しけむ わたつ海の八重のしほ路をへたてぬる 我か日の本に居なからに
見るそうれしき親をおもふ 我か子のふかきこゝろおもひは
- ▶ おくられし 花の香よりもおくりぬる
- ▶ 人のなさけの ふかくもあるかな

正澄

15. 正澄から貫一が学んだもの

生涯にわたる研究への精進

(1925年2月頃の日記に書かれた日課表)

月曜の欄

7時30分-8時⇒欧

8時-8時30分⇒朝食

8時30分から9時⇒雑多

9時から11時⇒writing at library

11時から12時⇒class

12時から13時⇒休憩

13時から16時⇒class

16時から19時⇒休憩

19時から21時⇒notes

21時から22時⇒欧法書

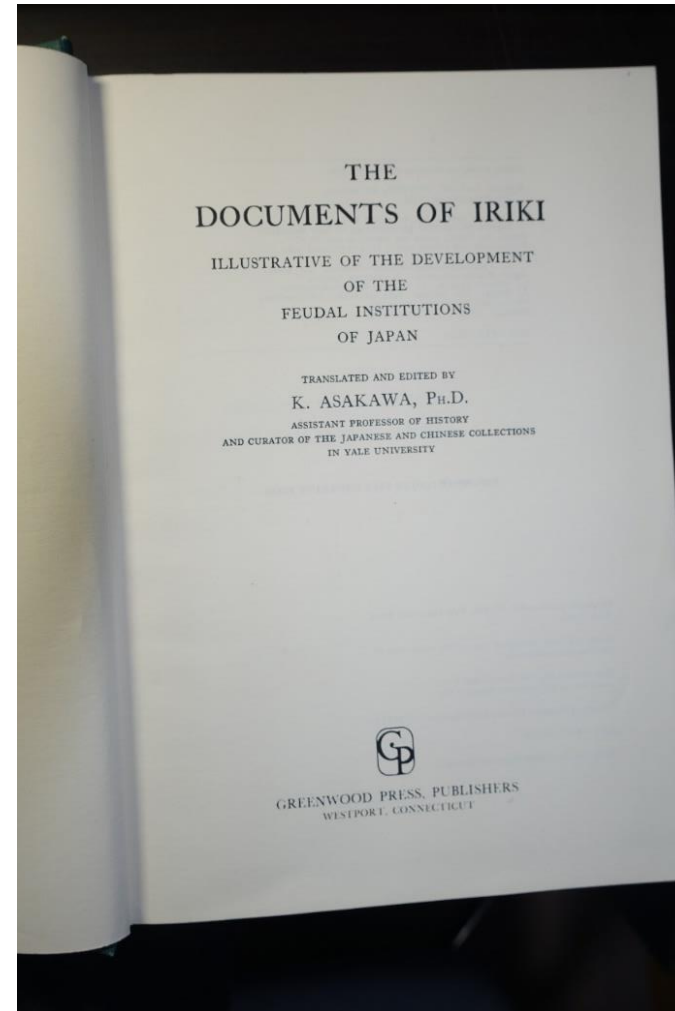
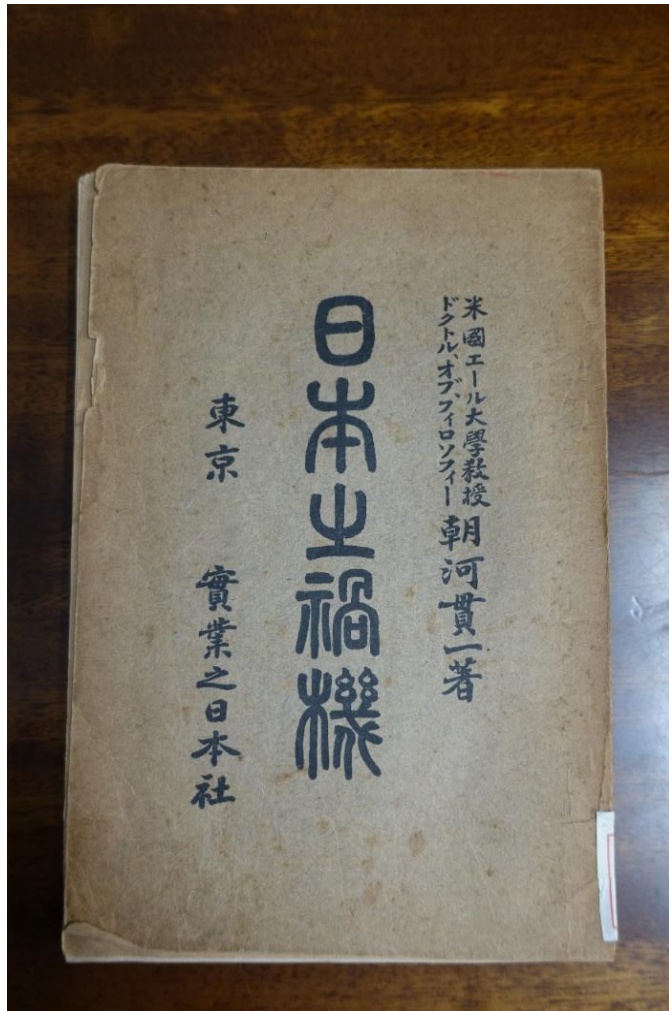
▶ 月曜から土曜にまで日々10時間の研究

▶ 日曜は9時朝食、手紙と雑読の日

	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
M	欧	欧	libr	libr	cl	cl	cl	class	notes						
T					休	休									
W															
Th			libr												
F								notes	cl	cl					
S									notes						
Su			手紙と雑読					6SA							

— is writing
9-10 P.M. Daily 雑読

16. 朝河貫一の著作 — 『日本之禍機』 (1909年)と 『入来文書』 (1929年)—



17. 朝河貫一の業績

- ▶ (1)Historian(歴史家)
 - ▶ 日本の封建制の研究、日欧比較封建制論の研究で欧米の歴史学界で高く評価。
 - ▶ 『入来文書(The Documents of Iriki,1929)』の英語での出版。
 - ▶ フランスのマルク・ブロックがとくに評価。欧米の日本史研究の基礎を作る。
- ▶ (2)Curator(東アジア図書部長)
 - ▶ イェール大学で日本・中国関係の図書の収集作業を行う。とくに日本研究
 - ▶ の基礎資料を集めた。
- ▶ (3)Peace Advocate(平和の提唱者)
 - ▶ 日本やアメリカの知識人に多くの書簡を送り、日本の国際的な孤立に警鐘
 - ▶ を鳴らし続ける。『日本之禍機』の出版。日米開戦を「天皇宛大統領親書」
 - ▶ により阻止しようとした。

おわりに一立子山の力



- (1) 正澄は砲術の専門家にして能筆家、優れた文才の持ち主。貫一の文才は正澄の教育の賜物。また「朝河天神」と呼ばれた正澄の克己の精神を受け継ぐ。
- (2) 正澄は身を粉にして立子山村のために尽力。二本松藩の「戒石銘」の精神の実現。「戒石銘」---「下民は虐げ易きも上天は欺き難し」。貫一は軍部独裁に向かう日本に対し、痛烈な批判を行う。正澄から学んだ二本松藩の精神の継承。
- (3) 立子山の重要性---明治の立子山は養蚕が盛んで繭、生糸、羽二重の特産地。優良村となった立子山村で育った経験が、貫一の歴史研究とくに日本中世の農村イメージに影響を与えた可能性。